

京都市教育委員会 完了報告書

1. 調査研究概要

本市では、全普通教室への冷房設備の整備や、給食回数の増加（年間197日）などの環境整備とともに夏季休業期間を短縮し、平成18年度から全ての小学校で年間205日以上の授業日数を確保している。（当時の政令指定都市の年間授業日数の平均は198日）

こうして確保した授業日数の中で、本市は学力の定着はもとより、様々な体験活動についても重視し、長期宿泊体験活動や生き方探究教育（スチューデントシティ学習）など本市ならではの体験活動を教育課程内で実施しており、事前・事後学習を含めると相当の時数をかけている背景がある。こうした、本市取組の経過や背景を踏まえ、以下のとおり研究を推進。

<平成29年度（1年目）研究主題>

- ①学校行事の工夫・精選を中心とした一定時数の確保
- ②学校行事と総合的な学習の時間を関連付けた単元構想

<平成30年度（2年目）研究主題>

- ①時数確保に向けた枠組みの形成
- ②教科・領域との関連性を明確にし、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」（長期宿泊自然体験事業、スチューデントシティ学習、修学旅行 等）

平成29年度は、各実践校において、学校行事の工夫・精選を中心に、一定時数の確保に向けた取組を実施し、年間指導計画、校時表、行事整理、授業改善など、各実践校の様々な工夫を共有することができた。

平成30年度は、主に、①時数確保に向けた枠組みの形成、②教科・領域との関連性を明確にした、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」（長期宿泊自然体験事業、スチューデントシティ学習、修学旅行 等）について研究を実施し、平成29年度に見られた課題解決を意識した研究を実施した。研究を進めるに当たって、本市検討会議委員からの助言も踏まえ、カリキュラム・マネジメントが、時数の枠の問題のみならず、3つの側面を意識した取組を進めた。

(年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	各実践校におけるカリキュラム検討会議 カリキュラム・マネジメントの手引リーフレット作成・配布
5月	各実践校におけるカリキュラム検討会議 各実践校における年間指導計画の作成 事務局による各実践校訪問（取組状況確認）
6月	
7月	各実践校におけるカリキュラム検討会議
8月	カリキュラム・マネジメント全市研修会（小中学校管理職、教務主任等） 各実践校におけるカリキュラム検討会議
9月	各実践校におけるカリキュラム検討会議

10月	各実践校におけるカリキュラム検討会議
11月	各実践校におけるカリキュラム検討会議 カリキュラム・マネジメント検討会議（実践校成果報告・検証・助言）
12月	各実践校におけるカリキュラム検討会議 先進校視察（戸田市立戸田東小学校→九条弘道小） 先進校視察（沼津市立静浦小中一貫学校→向島南小，向島二の丸小，向島中）
1月	
2月	カリキュラム・マネジメント検討会議（研究成果等の総括・報告書内容確認）
3月	調査完了報告書，実践報告書の作成 先進校視察（横浜市立池上小学校→下京雅小）

2. 調査研究の内容

京都市立下京雅小学校

2-1 調査研究の内容

○関連単元配列表の活用について（手順：作成→実践→加筆・修正→実践→まとめ）

- ・年度当初に教務主任が共通様式を各学年会に示し，学年会で検討。その後，校内研修等で全学年分を共有し，改善点等の協議を実施。年間を通じて，常に実践・修正を繰り返すよう教職員は意識するようになっている。

○保護者アンケートの結果受けた，下京雅5大フェスティバルの改善について

- ・29年度に実施した5つの学校行事について，全ての行事で保護者アンケートを実施し，保護者の意見をもとに，30年度の実施時期や実施手法の見直しを行った。

（時数確保に向けた枠組みの形成について）

○授業時数の確保について

- ・木曜6時間目について，5・6年は通年で毎週実施，4年は2学期から毎週実施，1～3年は実施なし。29年度は隔週実施であったが，保護者への周知を含め，中々定着できない課題があったため，変更を行った。

○年間時数の把握による，学年週時数の設定について

- ・年度当初に計画を作成し，見直しを持って週時数の設定を行った。

（教科・領域との関連性を明確にし，計画的かつ確かな単元構想のもとで，一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」について）

○総合的な学習の時間の見直しについて

- ・各教科や学校行事との関連づけを意識した内容の見直しを行い，一部の時間を総合的な学習の時間に充当できるよう工夫した（長期宿泊等を「探究的な学習」としてとらえ，総合的な学習の時間で学ぶ等）

<平成30年度 各種行事等の実施状況>

行事名	実施日	準備時数	教科等の位置づけ	ねらい・目標・工夫等
運動会（6年） スポーツ	9/29（土）	約16時間	体育科 （当日は学校行事）	下京雅5大フェスティバルの一つとして取り組む。体育学習の

フェスティバル				成果を発信する場。ハードル走とリズムダンスの学習内容を発信する。
奥志摩みさきの家 (宿泊学習)	5/29(火) ~31(木)	30時間	総合的な学習の時間 (当日も総合)	探究的な学びを展開するために、海や山などの自然のよさや <u>自然とのかかわり方という探究課題を設定して授業を進めていく。</u>
花背山の家 (宿泊学習)	5/8(火) ~11(金)	30時間	総合的な学習の時間 (当日も総合)	探究的な学びを展開するために、わたしと仕事というテーマで、長期宿泊学習の中で、自分にできることを考え、 <u>役割を全うすることの意味や大切さについて考える学習展開</u> で授業を進めていく。
修学旅行	6/7(木) ~8(金)	20時間	総合的な学習の時間 (当日も総合)	探究的な学びを展開するために、 <u>京都府とは異なる愛知県の魅力やそこに暮らす人々の生活という探究課題を設定して授業を進めていく。</u>
スチューデントシティ	9/7(金)	20時間	総合的な学習の時間 (当日も総合)	探究的な学びを展開するために、 <u>社会で働く人々の姿と働くことに対する自己の将来という探究課題を設定し授業を進めていく。</u>
学習発表会(6年) コミュニティー フェスティバル	10/30(火)	約15時間	総合的な学習の時間 国語科 社会科 (当日は総合)	下京雅5大フェスティバルの一つとして取り組む。 <u>総合的な学習の時間、生活科の成果を発信する場。参観者を巻き込んだプログラムの検討。</u>
音楽発表会(6年) ハーモニー フェスティバル	6/30(土)	約10時間	音楽科	下京雅5大フェスティバルの一つとして取り組む。 <u>音楽科の成果を発信する場。</u>
人権集会 ヒューマン フェスティバル	12/3(月)	3時間	道徳+学活	下京雅5大フェスティバルの一つとして取り組む。 <u>一部(道徳全校授業公開)+二部(テーマに沿った人権集会)</u> で構成されたもの。今年度はオリパラ教育を題材としてゲストティーチャーを招く。
作品展 アート フェスティバル	2/20(水) ~22(金)		図画工作科	下京雅5大フェスティバルの一つとして取り組む。 <u>図画工作科の成果を発信する場。参加型作品展を目指し、「一秒アート」や「ステキ広場」の取組を進める。</u>

2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

(子どもの視点から)

- 昨年度からの取組である「下京雅5大フェスティバル」は、子どもたちにとって目指すべき目標となってきた。各フェスティバルのスローガンを子どもたち自身で考え、それに向かって、自分の今ある力を出し切ることができた。また、めあて・振り返りカード(全校統一)を使いながら、5つのフェスティバルごとに、自分の成長を感じることができた。
- 自分自身で、「この学習を進めていくためには、どのような力が必要か」「この学習でどのような力がついたか」について考えることで、学びをメタ認知し、一般化することができるようになった。
- 下京雅5大フェスティバルが学校文化として定着していくには時間がかかる。子どもたちにとって、魅力のある取組となるためにも、今後、さらに「自分で創る」「自分たちで創る」フェスティバルに向けていく必要がある。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 昨年度、A週B週を設定し、週のコマ数を調整することで時数確保を行った。欠時を少なくする観点では成果があったが、混乱を招くこともあり、今年度は学期ごとに週時数を変更し時数確保に努めた。その結果、見通しをもって授業を計画することができた。
- 統合2年目となり、昨年度の取組を基に進めていくことができたこともあり、負担は少し軽減することができた。
- 5大フェスティバルリーダーを中心に、各フェスティバルを展開することができ、主体的に学校運営に参画する教職員の姿があった。
- 総合的な学習の時間について、下京雅5大フェスティバルを発信の場としてとらえ、単元を進めていくことができた。また、宿泊学習についても、学習内容としてとらえることで、授業時間内で、効率よく進めていくことができた。
- 宿泊学習自体については、負担なく進めていくことができたが、一方で「探究的な学びとなっているのか」という課題が残った。効率よく進めていくことと、探究的な学びを進めていくことの両側面を捉える必要があり、来年度検討していく必要がある。
- 下京雅5大フェスティバルを中心とした総合的な学習の単元構築が必要と考えている。発信の場という位置づけから、フェスティバルを学習内容としてとらえ直しフェスティバルの単元化ができるのではないかと考えている。そうすることで、この下京雅5大フェスティバルが学校文化として、学校内外へ波及することにつながると思う。

(地域との関係の視点から)

- 地域教材、人材の確保など学校外リソースの活用は依然として課題が残る。地域ぐるみで子どもたちを育てる観点から、より強いつながりを構築していかなければならない。また、下京雅5大フェスティバルが必然的に地域社会とつながるような内容に構築していくことも必要である。社会に開かれた教育課程の実現のために、社会に出たときに生きて働く資質能力の育成は不可欠であり、地域社会と共有連携して進めていきたい。

(改善方法等)

- 統合3年目、新校舎移転の年でもあることから、3年間の取組成果をしっかりとまとめていきたい。
- 教職員一人一人自ら、カリキュラム・マネジメントを行い、みんなで創る学校を目指す。
- 下京雅5大フェスティバルの単元化を目指す。そして、資質能力の学校教育目標を設定し、明確な目標として取組を進める。

2-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	○カリキュラム・マネジメント研修(見通し, 計画)
5月	○平成30年度 年間カリキュラム(下京雅スタンダード)作成(案)
6月	○平成30年度 下京雅スタンダード 現状把握調査開始(本年度内に完了)
7月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(行事の再編・検討)
8月	○カリキュラム・マネジメント研修(中間点検, 加筆修正, 情報交換)
9月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(各行事の振り返りと次に向けて)
10月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(各行事の振り返りと次に向けて)
11月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(各行事の振り返りと次に向けて)
12月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(各行事の振り返りと次に向けて)
1月	○下京雅カリキュラム・マネジメント 検討会議(来年度に向けて)
2月	○平成31年度 下京雅スタンダード 素案作成 会議
3月	○先進校視察(横浜市立池上小学校)

京都市立九条弘道小学校

2-1 調査研究の内容

○外国語活動の授業時数拡大

- ・29年度は教育課程を工夫して、3・4年で年間12時間の外国語活動、5・6年では35時間の外国語活動を実施。30年度は実施時数を拡大し、3・4年で35時間の外国語活動、5・6年生で70時間の外国語活動を実施した。
- ・また29年度は校内研修の工夫(重要テーマのミニ研修の設定、時間の短縮と内容の深化を進め、30年度以降、30コマの週ができたとしても校内研修や教材研究の質を落とすことがないように校内研修の充実を図り、新学習指導要領に対応できるように取り組んできた。29年度の実践を通して、常に子どもの学習状況と学校の取組を検証してきたが、30年度も引き続き、改善に向けた研究を進めている。

○振り返りチェックシートの活用について

- ・授業改善や教材研究の一環で、「振り返りチェックシート」を活用している。
ここには、スペースは狭いが、本時の学習と「道徳との関連」「他教科・領域との関連」「総合的な学習の時間との関連」を書き込むことで、担任のカリキュラム・マネジメントの意識化を図っている。

○研究主任によるカリキュラム・マネジメント研修について

- ・カリキュラム・マネジメントを進める意義や目的、方法を研究主任が主体となって、研修会

を実施した。後半は、研究の内容と関連付けながら提案を行い、教員の意識を高める研修機会となった。

(時数確保に向けた枠組みの形成)

○授業時数の確保について

- ・外国語活動(3・4年:35時間, 5・6年:70時間)の授業時間を確保するため、毎週、木曜日の6校時を設定し、授業時数を確保した。その分、木曜日に設定している職員会議時間が短くなったが、事前に電子メールで提案案件を提示するなど、会議時間の効率化を図り、さらに授業研究会の日も、公開授業を6校時設定にし、授業時数を確保した。

(教科・領域との関連性を明確にし、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」)

○学校行事と教科等との関連づけについて

- ・長期宿泊自然体験活動では、閉鎖校でのキャンプ(すべて野外炊事による自炊)を実施しており、この活動では、特別活動(学級活動)や家庭科、国語科、図工科等と関連づけて取り組んだ。

○校内研究の見直しについて

- ・29年度まで授業改善を研究テーマとして「国語科の研究」と「未来創造型生き方探究教育」を研究の柱に据え校内研究を推進してきたが、30年度は、研究教科を「総合的な学習の時間」に1本化し、新学習指導要領の方向性を確認しつつ、今まで取り組んできた本校の未来創造型生き方探究教育を徹底的に見直すこととした。
- ・そのために、「総合的な学習の時間」の授業構想や授業内容、授業方法を改めて研究することで、本校が目指していることを明らかにしたいと考えた。さらに、カリキュラム・マネジメントの視点で、教科・領域の関連性を明確に捉えるため、特に関連単元配列表を活用することとした。

○関連単元配列表の活用について

- ・関連単元配列表を日常的に意識して書き込むことで、教科・領域との関連性を明確にし、単元でつけるべき資質・能力を常に意識するように取組を進めている。研究授業の指導案検討を行う研究部会では、公開授業学年の単元配列表も活用し、つきたい力や目指す子どもの姿を重点的に確認しながら進めている。
- ・また、生き方探究教育である「スチューデントシティ学習」では、総合的な学習の時間で行う「ふれあい学習」と関連付けて取り組んでいる。このように捉えることでより探究的な学習となるよう充実させており、子どもたちの学びに向かう意欲も向上してきている。

<平成30年度 各種行事等の実施状況>

行事名	実施日	準備時数	教科等の位置づけ	ねらい・目標・工夫等
運動会(6年)	10月3日	10時間	体育の表現運動や体ほぐしの運動、ハードル走の学習として位置付けて練習を重ねた。 (当日は学校行事)	組体操を見直し、表現運動と組み合わせ、安全に配慮した演技構成とした。また、児童にとって無理のない演技構成にすることで、練習時間の削減を図った。プログラムを見直し、午前中開催とし、前

				年度から2コマ余剰を生み出した。
奥志摩みさきの家 (宿泊学習)	11月2～4 日	5時間	学級活動内容1の「イ学級内の組織づくりや仕事の分担処理」「ウ学校における多様な集団の生活の向上」に位置づけた (当日は学校行事)	「みさきの家」の活動をその活動のためだけの活動にせず、年間を見通した学級集団づくりの中に位置づけた。みさきの家での活動の目標や役割分担を考えることにより、今までの学級集団の現状や課題を、この活動により克服していこうとすることができるようにした。また、九条塔南小学校との小小連携の取組も兼ね、交流授業を行い、みさきの家での活動の充実を図った。
花背山の家 (宿泊学習)	8月31日～ 9月3日	5時間	学級活動や家庭科に位置づけ (当日は学校行事)	自然体験・長期宿泊活動をその活動のためだけの活動にせず、年間を見通した学級活動の学級集団づくりの中に位置づけた。活動の目標や役割分担を考えることにより今までの学級集団の現状や課題をこの活動により克服していこうとすることができるようにした。 また、 <u>野外炊事をするにあたり、家庭科での調理実習を野外炊事の練習と兼ねた。お家の方に手紙を書く活動を入れ、国語科で学んだ書き方を活用し、発展的に学習できるようにした。</u>
修学旅行	5月31日・ 6月1日	4時間	総合的な学習の時間として位置づけ (当日は学校行事)	総合的な学習の時間で「生きる」ということをテーマに学習を進めている。修学旅行での見学先でも「生きる」ということを視点に見学をし、 <u>総合的な学習の時間の内容として位置付けている。</u>
スチューデントシティ (6年)		15時間	総合的な学習の時間として位置づけ (当日も総合)	総合的な学習の単元「生きる」の導入として位置づけた。働くということを入口に「生きる」ということについて考えた。スチューデントシティの取組がそれだけの活動になることがないように、 <u>総合的な学習の時間の年間計画の中に位置づけている。</u>
学習発表会 (6年) 学校独自の「ふれあいタウン」の取組		50時間 総合的な学習の時間の単元時数	総合的な学習の時間として位置づけ (当日は学校行事)	総合的な学習の時間の単元構想の中で位置づけているため、 <u>準備も総合的な学習の時間の授業として意味づけをしており、特別な準備時数はない。</u>

2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

(子どもの視点から)

- 学校行事を精選することで、個々の行事に対して集中して取り組むことができた。学習内容については、総合的な学習の時間を中心に他教科・領域等との関連を図り、行事ありきの取組とならないように、学習効果を高めるための行事として位置付けることができた。
- しかしながら、現状ではまだ子どもの生きる力として還元するところまでには至っていない。カリキュラム・マネジメントを行うことで、子どもが学習したことを生かして、次の行事や他の教科領域の学習に対し、主体的に取り組んでいこうとする意識をもてるように改善を加えていくことが必要だと考える。現状では、教師主導の域を脱していないことが課題と言える。
- 関連単元配列表を作成する際、余裕のないカリキュラムになってしまわないように心掛ける必要がある。子どもの発想を生かし、学びにつなげていくことができるための余裕が大切であると考える。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 木曜日の6時間目を設定したことで、外国語の授業時数の確保をすることができた。しかし、職員会議、研修などの時間が短くなり、職員会議、研修の取り方など工夫したが、行事等の共通理解の時間を確保することが難しい面もあった。今後は教職員の異動により組織が年々変わることを念頭におき、全ての教育活動の意義目的を継承しつつ共通理解を図るシステムの構築が必要である。

(地域との関係の視点から)

- 学校がどのような目標を持ち、どのような子どもたちを育てていきたいのかという方針を明確にし、学校運営協議会やPTA総会などで丁寧に説明してきた。そのことで、学校の姿勢に対して、一層の理解を得ることができ、地域や保護者からの協力・支援を得ることができた。関係単元配列表を作成し、年間の見通しを持つことで、地域の方にゲストティーチャーとして授業参加いただくことや、地域行事に子どもが積極的に参加できるような学習を計画できた。
- 学校運営協議会の理事会の在り方を検討し、改善を図っているが、「社会に開かれた教育課程」の実現のために、今までより一層、学校運営協議会の組織的な充実を図る必要がある。今年度、学校を共に作る参画者として地域の位置付けを明確にし、今後の方向性を探ってきたが、今までの地域の取組との兼ね合いを再度検討し、地域と話し合っていく必要がある。

(改善方法等)

- 単に時数確保のためのカリキュラム・マネジメントにならず、効果的な教育活動を展開するために、関連単元配列表などを積極的に活用できるようにしたい。研究や部会などの研修時間を使い、定期的に進捗状況や改善点を確認しながら進めていかなければならないと考える。今年度考えてきた学校で育てたい資質・能力の育成が図られているかどうかということを軸にして検証していく。
- 「社会に開かれた教育課程」の実現とともに、更なる「働き方改革」を推進するために保護者・地域の学校教育の理解を深め、学校教育への参画を求めていく必要がある。
「地域で育つ子ども」をめざし、学校、地域、家庭の連携をさらに深めていく。学校がすべ

きこと、保護者・地域に委ねることを学校運営協議会での「熟議」や学級懇談会での保護者との話し合いの中で明確にしていく必要がある。

2-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	職員会議、校内研究（今年度の学校経営方針（カリキュラム・マネジメント）の提示）
5月	校内研究（授業研1）研究部会、C会
6月	3C研修（ふれあいタウンに向けて）、校内研究（授業研2）
7月	校内研究（授業研3）研究部会
8月	校内研究（総合的な学習の時間の単元見直し）、研究部会
9月	校内研究（関係単元配列表の見直し）（授業研4）、研究部会、3C研修（ふれあいタウンに向けて）
10月	校内研究（授業研5）（授業研6）、研究部会
11月	校内研究（授業研7）（授業研8）
12月	校内研究（授業研9）、研究部会（中期振り返り、単元見直し）
1月	校内研究（授業研10）、3C研修（ふれあいタウン後の実践交流）
2月	校内研究（総合的な学習の時間でつきたい力振り返り）（関係単元配列表見直し）
3月	校内研究（研究のまとめ）

京都市立向島南小学校

2-1 調査研究の内容

○教職員への年間授業時数周知の徹底

- ・年度当初に年間の授業時数表を作成し、全教員で共有することで、見通しを持って計画を立てるよう工夫した。

○昨年度の課題でもあった授業改善（校内授業研究会・事後研究会を通して）

- ・フレッシュ研（指導案のない授業研究会）

前日のプレゼンで指導者が参観者に見どころを伝え、授業後、個々に付箋を持ち寄り、授業者にプラス面・マイナス面・興味深かった点などを伝えるなど、実施方法の効率化を図った。

- ・校内授業研究会の在り方

子どもたちにつきたい力についての分析と共通理解、全国学力・学習状況調査の結果分析、思考ツールの活用法についての検討を行った。

○関連単元配列表をもとにした単元構成

- ・各学年の関連単元配列表をもとに、教科横断的な指導の実現のため、視覚化して学習指導が行えるよう取り組んだ。また、学力向上の面で研究部が今年度の校内授業研究会後の事後研究会の在り方を提案し、子どもの実態をより分析し、つきたい力を全体で共有することとした。それにより、今、目の前の子どもにどんな力をつけなければならないかが、教職員の中で共通理解でき、授業改善にもつながっている。

○短時間学習の取組み

- ・短時間学習では、曜日ごとに取り組む課題を全教員で確認し、10分の短時間でやりきらせる

ことを進めてきた。既習事項の復習を通じた基礎・基本の徹底はもとより、読解・作文にも取り組んでいる。

○職員会議での案件の精選

- ・職員会議では提案者の持ち時間を明記し、15時30分から17時までにはできるだけ収まるように意識づけを行った。

○学校行事への準備時間の精選

- ・31年度の向島二の丸小学校との学校統合を見据え、運動会・学習発表会への練習時間削減など、授業時数の確保と行事の見直しを行った。

(時数確保に向けた枠組みの形成について)

○授業時数の確保に向けた取組

- ・原則、4年生以上は毎週木曜日を6校時設定とし、3年生については、クラブや委員会活動のない日を6校時設定として授業時数(外国語活動)を確保した。30年度は、校内授業研究会を各学級(年間で16回)で公開することとしており、16週分の欠時が生じる。その欠時を補填するため、基本的に毎週6校時授業を実施した。
- ・校内授業研究会が月に2回以上あり、欠時をできる限り減らすよう公開授業を6校時設定とし、欠時が出た学年は5校時設定の日に6校時を追加実施することで回復に努めた。
- 低学年の英語活動については、短時間学習を活用し、時数確保に取り組んだ。

(教科・領域との関連性を明確にし、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」)

○関連単元配列表の活用について

- ・関連単元配列表を各学年に活用し、国語科を中心に指導案の体裁を工夫しながら学習活動を進めている。学年会等においても関連単元配列表をもとに授業や行事の関連等についての協議を進め、計画的に実施した。

○「総合的な学習の時間」について

- ・来年度開校する向島秀蓮小中学校に向けて向島二の丸小学校・向島中学校とともに6年間のカリキュラムを考え、つけたい力や単元計画等の協議を実施している。

<平成30年度 各種行事等の実施状況>

行事名	実施日	準備時数	教科等の位置づけ	ねらい・目標・工夫等
運動会(6年)	10/20	・体育 18H ・行事9H	・体育との関連 ・体育的行事	事前に練習時間を定め、計画的に指導を進められるようにした。
奥志摩みさきの家 (宿泊学習)	7/15~17	行事18H	・理科との関連 ・総合的な学習の時間との関連	星座や防災についてなど、関連づけが可能なものを取り上げた。
花背山の家 (宿泊学習)	6/22~25	行事24H	・総合的な学習の時間との関連	自然環境など関連づけが可能なものを取り上げた。
修学旅行	5/16~17	行事12H	・社会科との関連	関連づけが可能なものを取り上げた。

スチューデント シティ	実施せず		・平成31年度より6 年生で実施 ・総合的な学習の 時間との関連	
学習発表会（6年 ）	11/23	行事4H	・総合的な学習の 時間との関連	来年度統合する向島二の丸小学校 と学習内容を合わせ、地域を調べ た結果を発表するようにした。ポ スターセッション形式での発表を 見据えてはいたが、 <u>児童の実態や 学習内容、準備時間などを考慮し 、学年全体での発表とした。</u>

2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

（子どもの視点から）

- 昨年度から、木曜日は昼休みをなくした上で6校時設定とし、初年度は児童に戸惑いがみられていたが、今年度も同様に継続することで、児童に昼休みがない木曜日の意識が身につき、時間を守りながら生活することができるようになった。
- 課題としては、校内での研究授業や校外での研修などで木曜日の下校時間が変わることもあり、保護者や放課後デイサービス等も含め、昨年度同様に問い合わせがあった。

（教職員の負担の視点、校務運営の視点から）

- 2年目ではあるが、高学年の担任にとっては、1週30コマの設定は大きな負担となり、十分な教材研究の時間の確保が困難であった。
- 木曜6校時を実施してからの会議や研修は、開始時間が遅くなり、案件の数にもよるが、時間内に収めようとすると細かな内容まで伝えきれないこともあった。
- 今年度はインフルエンザ等による学級閉鎖に加え、自然災害のための授業時数の欠時がかなり多く発生し、毎日6時間の設定をしていることにより、授業に欠時が出た際の時数回復が困難であった。

（地域との関係の視点から）

- 今年度も、登下校のみまもり隊の方々へ下校時間の変更を伝えたり、児童館へ連絡したりすることがあったので、その連絡が負担になることがあった。

（改善方法等）

- 平成31年度から、向島二の丸小学校・向島中学校とともに、義務教育学校として「向島秀蓮小中学校」が開校する。3校それぞれで実施してきた行事も、残すものと解消するものに整理し、教職員の負担が大きくなるようにする必要がある。行事については、学校体制としてどのように準備を進め、授業時数を確保していくのかを検討する。
- すべての教員の授業改革の意識を更に進め、向島秀蓮小中学校の研究のテーマにもなっている、「クリティカルシンキング」を意識して授業に取り組むために必要な力量を高めていく必要がある。

○授業時数確保のために、今年度実施した「木曜6校時」の在り方について、統合後も更に検証を進めていく。

2-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	職員会議①②③④ 向島4小合同研修会 3校合同会議① 校内研究会① 【年間行事の精選について・時数の工夫(校時表)・年間学習計画表作成】
5月	職員会議⑤⑥ 3校合同会議②【各部会にて9年間を通したカリキュラムの作成】 校内研究会② 校内授業研究会① 生徒指導研修会②
6月	職員会議⑦ 学習評価委員会① 3校合同会議③ 校内授業研究会②③
7月	校内授業研究会④ 3校合同会議④
8月	職員会議⑧ 3校合同会議⑤ 【重点課題プロジェクト部会より、向島秀蓮小中学校の9年間を通した特色ある取組について報告(ピアサポート・新設「こころ科」・教科のたて持ち・秀蓮プライドBUILD(健康と生活)・英語科、外国語活動プログラム・帯学習(モジュールタイム)の取組について】
9月	校内授業研究会⑥⑦⑧ 3校合同会議⑥
10月	職員会議⑨ 不登校対策委員会② 校内授業研究会⑨ 3校合同会議⑦
11月	職員会議⑩ 3校合同会議⑧ 校内授業研究会⑩
12月	職員会議⑪ 校内授業研究会⑪ 3校合同会議⑨ 支部研究発表会①
1月	職員会議⑫ 3校合同会議⑩ 校内授業研究会⑫⑬ 総合育成支援研修会②
2月	職員会議⑬ 3校合同会議⑪ 生徒指導研修会④ 校内研究会④
3月	職員会議⑭ 向島秀蓮小中学校職員会議①【H31行事について、授業時数について等】 校内研究会⑤

京都市立向島二の丸小学校

2-1 調査研究の内容

○年間指導時数表の改訂について

- ・年度当初に、1学期、2学期、3学期ごとに時数が見通せる様式を作成し、全教員で共有を図った。また、授業実施予定時数表を作成し、常に年間の総指導時数を見られるよう工夫した。

○短時間学習の活用について

- ・学習指導計画表に短時間学習と教科学習との関連を明記し、基礎・基本事項の定着や学習内容のフィードバックなど効果的に短時間学習の時間を活用できるようにした。

○職員会議等の実施方法の改善について

- ・会議の内容・案件を見直し、会議を木曜6校時終了後に設定することで授業時数を確保した。同時に会議の効率化、会議時間の短縮化を図った。具体的には、会議内容を精選し、終礼での提案やメール周知への変更や、会議のペーパーレス化を図ることで準備の短縮化を図るなど時間を生み出した。
- ・教職員に配布する週予定に、毎週の各教科等の授業時数を明記し、週案と見比べながら見直しをもって学習を計画できるようにした。
- ・校内の研究授業を見直し、全体での研修を削減。学年部毎の部会授業にスライドすることで

- ・ 研究としての取組は確保しつつ、各学年の授業時数を確保した。
- ・ 音楽はスクールサポーターを活用し、原則専科制として担任の持ち時間を削減した。

(時数確保に向けた枠組みの形成について)

○授業時数の確保について

- ・ 昨年度同様、4年生以上については「クラブ、委員会」のある週の木曜を6校時設定にすることで、16時間の追加時数を確保。
- ・ 昨年度の反省点として、木曜6校時設定の日に会議が入るなどして木曜6校時を確保できなかった週があったことから、今年度は欠時が生じた場合は、翌週に木曜6校時を実施しクラブ・委員会実施分16コマの木曜6校時を確実に確保できるよう工夫した。
- ・ 木曜日の職員会議を6校時終了後に設定し、会議時間を短縮することで授業時数を確保。
- ・ 課題としては、週の時数が4年生以上で30時間となり、子どもや教員にとっての負担は重くなっている状況がある。

(教科・領域との関連性を明確にし、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間まとめて行う「総合的な学習の時間」「特別活動」)

○年間指導計画表の有効活用について

- ・ 年間指導計画表を全学年分作成し、学年会等で年間を見通しながら計画的に教育活動を進められるようにするとともに、学校行事や各教科等の学習内容や付けたい力の関連性を鑑みながら学習計画を立てられるよう全担任・TT担当に指導計画を配布、学年会で活用できるようにした。
- ・ 「学校教育目標・目指す子ども像」を軸に3学期を見通して育てたい力・姿を3つのステージに分け学習指導計画表に明記し、各学年で目標に向かって計画できるようにした。

○総合的な学習の時間について

- ・ 「総合的な学習の時間」では、来年度開校する小中一貫校での内容を向島南小学校・向島中学校との3校で先行実施。作成済の単元計画・付けたい力をもとに、指導計画表に位置付け、他教科・領域・行事と関連付けながら学習を展開している。

<平成30年度 各種行事等の実施状況>

行事名	実施日	準備時数	教科等の位置づけ	ねらい・目標・工夫等
運動会 (6年)	10月13日 (終日)	・体育18H 行事9H (・全校練習3H, 本番6H)	練習は体育の単元として実施。全校練習および本番は体育的行事で実施	全校練習・応援練習を見直し、 <u>昨年度より2時間分余剰を生み出した。</u> 内容をできるだけ体育学習と関連付けられるものを工夫した。
奥志摩みさきの家 (宿泊学習)	7/15~ 7/17	行事 18H	総合的な学習の時間と関連付け	関連付けが可能な内容を選択した。(防災)
花背山の家 (宿泊学習)	6/22~ 6/25	行事 24H	総合的な学習の時間と関連付け	関連付けが可能な内容を選択した。(自然)

修学旅行	5/17～ 5/18	行事 1 2 H	総合的な学習の時間・社会科との関連付け	関連付けが可能な内容を選択した。（歴史）
スチューデントシティ	今年度は実施せず	—	※H31年度より6年生で実施。総合的な学習と関連付け	
学習発表会（6年）	11月21日 （1～3年午前中，4～6年終日）	<取組> 音楽，総 合約15時 間程度 <発表会> 行事2H 音楽2H 総合2H	音楽科・総合的な学習の時間の取組を発表する場として設定	音楽の発表は音楽の時間に学習したものに絞ることで、「発表のための練習」時間をカット。総合学習発表は、4～6年生のみ。来年度からの小中一貫教育校での取組を先行実施。

2-2 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方法

（子どもの視点から）

- 昨年度の課題でもあった、「木曜日の午後の流れが、校内研修内容や6校時設定によって毎週状況が異なっていたため、担任も十分に状況把握できず混乱することがあった」点について、①5校時の日と②6校時の日の2パターンに整理・簡素化したことで、平成30年度は混乱なく進めることができた。「クラブ、委員会のある週は6校時まで」とルール化し、子どもにも分かりやすく取り組むことができた。次年度は義務教育学校となるため、引き続き、子どもたちが混乱なく理解しやすい校時設定を検討する。

（教職員の負担の視点，校務運営の視点から）

- 高学年は週の授業時数が29～30コマと授業準備にかかる負担も多く、放課後の時間が十分に取れない状況であり、時間外勤務の増加が余儀なくされていることもある。
- 月曜6校時に授業又はクラブ・委員会活動を設定したため、4年生以上では補習的学習や発展的学習を実施する時間が確保しづらくなった。
- 木曜6校時を実施すると、会議や研修の開始時刻が遅くなるため、効率化，短縮化を図ることで対応を行った。
- 行事に向けて取り組む時数が各学級の裁量であり、学年によって差が生じるなどしたため、改善を図る必要がある。

（地域との関係の視点から）

- 放課後の下校安全見守り隊の方には、木曜の下校時刻が変動するので、その都度案内を出していたが、毎週の案内文作成が負担であった。

（改善方法等）

- 従来は、担任裁量で毎週の時間割を組み、時間割変更や授業延長などが起きやすかったため、平成31年4月の学校統合を見据え、固定時間割を原則として取り組むよう進めてきた。しかしな

がら、固定時間割という意識は定着しておらず、毎週の担任裁量での時間割設定になってしまっている現状があり、改善を図っていく。

○今年度、出前授業を必要なものに精選したことで授業の進捗にゆとりができたため、引き続き、本当に必要なものかどうか精選を図っていく。

○授業時数確保のため学校現場では最大限スリム化を図っているが、教育委員会などから依頼される取組で、年度初めに予定していなかったものが急に入るケースもあり、マネジメントしきれず打合せ等に係る学年負担の増加につながってしまうこともある。

○義務教育学校への統合を見据え、運動会や学習発表会など、行事当日だけではなく、それに向けて取り組む時数も現在調整中であり、できる限り、効率化を図っていく。

2-3 (実践校における年間実施スケジュール)

月	取組内容
4月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議① 【年間行事の精選について・時数の工夫(校時表・基本週時間割作成)・年間学習計画表作成】
5月	3校(向島二の丸・向島南・向島中)合同全体会議② 【各部会にて9年間を通したカリキュラムの作成】
6月	
7月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議② 【1学期の授業時数確認, 検証・帯学習と教科の関連付けについて】
8月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議③【夏の合同研修, 全市研修を受けて】 ・3校合同全体会議⑤【重点課題プロジェクト部会より, 向島秀蓮小中学校の9年間を通した特色ある取組について報告(ピアサポート・新設「こころ科」・教科のたて持ち・秀蓮プライド BUILD(健康と生活)・英語科, 外国語活動プログラム・帯学習(モジュールタイム)の取組について】
9月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議④ 【チャレンジタイムの取組の振り返り・年間学習計画との関連付け】
10月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議⑤ 【ジョイントプログラムテストの結果を受けて, 各教科の付きたい力と, 教科の関連付けを分析】
11月	
12月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議⑥ 【2学期の授業時数確認, 検証】
1月	
2月	向島二の丸小学校カリキュラム・マネジメント検討会議⑦ 【年間授業時数確認・検証, 年間総括】
3月	向島秀蓮小中学校職員会議①【H31行事について, 授業時数について等】

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

(子供の視点から)

- 実践校では、学校行事を教科等と関連させ、例えば各行事のスローガンを子ども自身で考えるなど、主体性を意識した内容へ見直すことにより、目的意識を持ち、十分に力を出し切ることができた。また、めあて・振り返りカード（校内で統一）を使いながら、行事ごとに、子どもの成長を感じることができている。
- 学校行事の精選により、個々の行事に対して集中して取り組むことができた。
内容についても、総合的な学習の時間を中心に他教科・領域等との関連を図り、行事ありきの取組ではなく、学習効果を高めることができた。
- 授業改善について、依然として教師主導の域を脱していない部分もある。子どもが学習したことを生かし、次の行事や他の教科領域の学習に対し、主体的に取り組んでいこうとする意識をもてるよう更に改善していく必要がある。
- 昨年度の校時表について、校内研修内容や6校時設定によって毎週状況が異なっていた学校では、担任も十分に状況把握できず混乱が見られたが、平成30年度は、①5校時の日と②6校時の日の2パターンに整理・簡素化したことで混乱なく進めることができた。また、継続するにつれ、子どもに時間的なルール意識が付き、時間を守りながら生活することができるようになった。

(教職員の負担の視点、校務運営の視点から)

- 主な学校行事にリーダーを設置することで、主体的に学校運営に参画する教職員の姿が見られ、円滑な校務運営を行うことができた。
- 職員会議や校内研究の時間短縮に伴い、内容の精選や必要な情報を素早く共有するといった効率化の意識が向上し、進行がスムーズになった。
- 総合的な学習の時間を中心に、学習発表会等の行事を学習成果の発信の場としてとらえ、計画的に単元を進めることができた。また、宿泊学習でも、一部を学習内容として位置づけることで、授業時間内で効率よく進めることができた。
- 宿泊学習の一部を総合的な学習の時間に位置づける際、「探究的な学び」となるように学習内容を見直すことに苦慮した。効率よく進めることと、探究的な学びの両側面を捉える必要がある。更に改善の必要がある。
- 高学年は週の授業時数が29～30コマと授業準備にかかる負担も多く、放課後の時間や補習的学習や発展的な学習の時間が確保しづらくなった。
- インフルエンザ等による学級閉鎖に加え、自然災害のための授業時数の欠時がかなり多く発生し、週30コマの設定をしていることにより、授業に欠時が出た際の時数回復が困難であった。

(地域との関係の視点から)

- 学校教育目標や、どのような子どもを育てていきたいのかという方針を明確にし、学校運営協議会やPTA総会などで丁寧に説明したことで、一層の理解を得ることができ、地域や保護者からの協力・支援を得ることができた。

○関係単元配列表を作成し、年間の見通しを持つことで、地域の方にゲストティーチャーとして授業参加いただくことや、地域行事に子どもが積極的に参加できるような学習を計画できた。

●昨年度と同様、時間割変更による、下校時間の変更があり、地域の方の見守り活動開始時刻の案内や児童館への連絡等、学校の負担が一部見られた。

(設置者(教育委員会)の視点から)

○各実践校において、昨年度の研究の成果・課題を踏まえた取組が進められ、授業時数の確保に向けた工夫事例や、教科等と関連された行事の実施など、学びの質を向上や時間的な効率化が図られる事例報告も行われた。その際、関連単元配列表を効果的に活用することで、カリキュラム・マネジメントの意識が、校長のみならず、各教職員まで浸透しつつある。

○平成30年度は、カリキュラム・マネジメントの手引リーフレットを作成し、全小・中学校へ配布するとともに、全小・中学校の管理職や教務・研究主任等を対象とした全市合同研修会を実施し、その目的や意義、先進校事例などの共有を図り、その後、各校の校内研究においても教員同士で積極的な議論が展開され、学校実態に即した改善が図られている。

●児童・保護者・地域等への情報伝達、授業時数増による教職員の負担感解消などは昨年度からの継続課題であるが、引き続き、働き方改革の視点も踏まえた改善を図っていく。

(改善方法等)

平成29年度の研究では、一定時数の確保を柱として各研究実践校において研究を実施し、各校学校行事の精選や時間割の工夫、職員会議の短縮化など、様々な取組を行った。

新学習指導要領に10年先駆けて年間授業時数を増してきた中で、一定の定着と成果を上げている本市のカリキュラムであるが、新学習指導要領の実施に向けて改めて学校全体で年間指導計画を丁寧に見直す機会となり、年間を通した各学年での授業時数管理や、学校行事の事前練習時間など、各教職員が全体計画を俯瞰して捉え、早い時期に状況把握・計画改善を行うなど、カリキュラム・マネジメントに関する意識向上が見られた。

また、「45分で授業をやりきる」という意識で、学びの質を向上させることが重要であることから、授業改善に向けた校内研究の体制充実が図られ、教科間や行事との横断的なつながりを意識した取組の進展が見られた。

一方で、時間割変更や週あたりの授業時数増などにより、喫緊の課題となっている教職員の働き方改革や、十分な教材研究時間、子どもと向き合う時間の確保など、様々な課題も見られた。

平成30年度の研究では、平成29年度に研究した、時数確保に向けた取組を確かなものとし、長期宿泊自然体験事業、スチューデントシティ学習、修学旅行などの行事について、「総合的な学習の時間」「特別活動」を中心とした教科・領域との関連性を明確にし、計画的かつ確かな単元構想のもとで、一定時間を授業時数として位置づける研究を実施した。

研究実践校では関連単元配列表を効果的に活用し、例えば、各種行事を「総合的な学習の時間」と関連させることで、授業時数の効率化はもとより、従来の活動内容を見直すことで探究的な学習活動につながり、児童の学習意欲が向上するなどの効果も見られた。

関連単元配列表については、「教科横断的な視点」と前後で実施される学習との「順序性」を意識した教育内容の配列が可能となり、学校教育目標や育みたい資質・能力とも相互に関連させながら、俯瞰して年間の学習を確認することができ、他教科との関連を踏まえた単元構想や学校行事の精選など、教育内容の効率化を図ることができた。今後、小中一貫教育という縦軸の視点での関連性を意識することにより、更に効果的な教育効果が得られると考えている。

課題としては、週 30 コマの授業を実施する場合、年間を通して時間的な余裕が少なく、自然災害やインフルエンザ流行により学校・学級閉鎖が発生した際、回復措置が困難な状況となった。また、研究実践校では、学校行事の精選や職員会議・校内研究の短縮など、効率化に向け積極的に取り組んだが、依然として、授業時数増加による教員の教材準備や、児童への負担は改善が必要な状況である。

今後に向けては、2年間の研究実践校による実践での成果・課題を全市へ発信するとともに、本市作成のカリキュラム・マネジメント手引を基にした研修の充実など、全教員の共通理解を図るとともに、教員の働き方改革を意識し、学校現場の負担軽減についても最重要課題として改善方策の検討を進め、学校実態に即した柔軟で特色ある教育課程の編成を目指す。